

季寄
註解

改正月令博物筌

九月部

三

俳諧資料カ一卜

0-58

年代



編者
(筆者)

書名

備考

(下垣内蔵)



九月部目録

△卯ある人能諧
の季と持りの之

○養生の法に雨風の考の米の豊凶
○妙茶の季とてぬ祭其外人家
重宝のこくハ処々不数多あり
ゆく目録よらんてある事

九月

卦 月支 調子 九
陰陽生 異名並註 初

△寒露節 九二丁 △霜降中 九三丁

日令

此部ハ九月日の定つてころ
支の定りころとてある事

○裕 九三丁 △御香宮祭 九四丁

△鞍馬祭 九四丁 四京 都野幸並神饗 九

△醍醐祭 九五丁 △木幡祭 九五丁

△不堪田奏 九五丁 日八 桂宮相模 九五丁

△醍醐宵祭 九五丁 △重陽節 九

△菊天 △菜節 九六丁 △彩節 九六丁

△菊花宴 △重陽宴 △菊の酒 九六丁
△菊瓶 △菜葉命 六丁

日九 日九

△菊の着綿カキ 七丁
△佩萸カキ 八丁

△菊花宴カキ 八丁
△何とめ酒カキ 八丁

△後雛カキ 九丁
△京醍醐祭カキ 九丁

△貴船祭カキ 九丁
△鹿谷天王祭カキ 九丁

△生玉祭カキ 九丁
△一宮祭カキ 十丁

△九日小袖カキ 十丁
△全日菊カキ 十丁

△小重陽カキ 十丁
△近江四宮祭カキ 十丁

△五條天神祭カキ 十丁
△下鳥羽祭カキ 十丁

△例幣カキ 十丁
△御難餅カキ 十丁

△太秦牛祭カキ 十丁
△後名月カキ 十丁

△後の月△豆名月△鷲名月
△二夜月△名残月△十三夜

△住吉相撲會カキ 十丁
△室の市カキ 十丁

△白川祭カキ 十丁
△天寺兼會カキ 十丁

△天王寺念佛會カキ 十丁
△都岩倉祭カキ 十丁

日五十

△粟田口祭カキ 十丁
△神田祭カキ 十丁

△小倉祭カキ 十丁
△岡寄祭カキ 十丁

△度會新嘗會カキ 十丁
△桂川御板カキ 十丁

△野の宮別カキ 十丁
△攝穴綾祭カキ 十丁

△攝吳服祭カキ 十丁
△山城南神祭カキ 十丁

△婆利女祭カキ 十丁
△旅夷祭カキ 十丁

△八幡花頭カキ 十丁
△上難波祭カキ 十丁

△定祭カキ 十丁
△座六祭カキ 十丁

△逆神祭カキ 十丁
△天滿流鏑馬カキ 十丁

△北山祭カキ 十丁
△津村祭カキ 十丁

△鳴滝祭カキ 十丁
△任吉神送カキ 十丁

△周防山口祭カキ 十丁

△伊勢御遷宮カキ 十丁
△番船△早綿カキ 十丁

年百中 日八廿 日六廿 日四廿

△月令
此部お八日の定らざる九月
一ヶ月のくまありしす

△推カ 推柴カ

△推カの葉△推カの枝
△由カての葉の
△團カ栗カ

△新カ胡桃カ
△新カ榧カ子カ

△新カ松カ子カ
△水カ木カ子カ

△菜カ萹カ
△瓢カ樹カ

△搜カ実カ
△熟カ柿カ

△無カ果カ花カ
△鴨カ上カ口カ

△仙カ蓼カ
△晚カ稻カ

△漆カ子カ
△紅カ葉カ
△種カのカくカのカ

△色カのカ松カ
△破カ芭カ蕉カ

△干カ土カ生カ
△うカらカ粘カ

△緑カ豆カ引カ
△蕃カ麥カ刈カ

△艸カ牡丹カ
△佛カ甲カ草カ

△小カ蓮カ花カ
△菊カ弱カ花カ

○艸カ木カくカくカ并カニカ用カ意カ

△梅カ實カ △梅カ嫌カ

△生カ類カ
此部カのカ九月カ一カ月カよりカのカ生カのカとカありカをカしカるカとカ

△尾カ越カ鴨カ
△熊カ栗カ棚カがカ

△霜カ踏カ鹿カ
△紅カ葉カ鮒カ

△豺カ祭カ獸カ
△爵カ公カ水カ為カ蛤カ

△細カ代カ打カ

△必カ用カ
此部カのカ風カ雨カのカ占カのカ破カ軍カのカひカのカ方カ。日カのカよりカ他カのカ行カのカ

心得カ。作カ事カのカよカしカ他カ。養カ生カのカ衣カ服カのカ式カ。生カ花カのカ式カ。料カ理カのカ法カ。食カ物カのカ式カ。等カ其カ外カ品カをカあカつカむカ日カのカ定カ。とカしカるカ日カのカ今カのカ部カのカ此カ

部カのカ日カのカきカまカしカるカ二カ月カ一カ月カ要カ用カのカ事カとカありカをカしカるカとカ

△紅葉カ衣カ

△紅葉カ衣カ

△紅葉カ衣カ

△紅葉カ衣カ

△紅葉カ衣カ

△紅葉カ衣カ

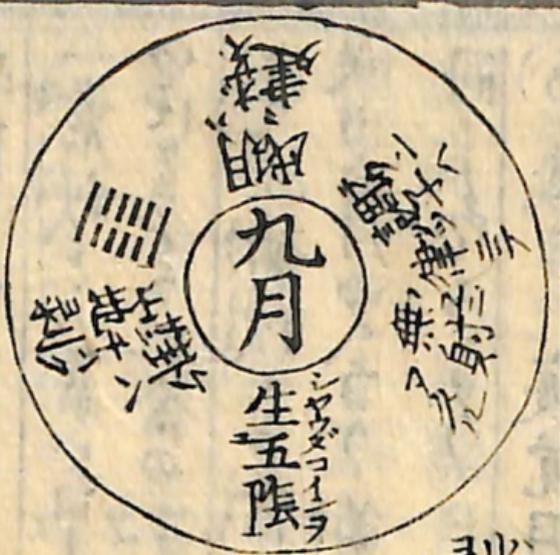
△紅葉カ衣カ

△紅葉カ衣カ

九月 目錄終

九月之部

△印付くハ世身能諧
季寄出て用米る景物



剥群陰陽と
剥尽寸月多
仍て草木花
葉とらて枝
幹漸とて
剥落すま

無射ハ陰気外陽氣降て萬物陽
氣小隨ひて出て貪るははたへハ
虫魚の類蟄伏一草木根ハ腐り
潜むはは射はは仍て無射と云

異名

△季秋 礼記の暮秋 留書采珍
△梢秋 四時纂要 晚秋 韵府

△無射 礼記の寒露 韵府の玄月 異名
△素秋 韵府の菊秋 事物異名

和名 彩月 〇紅樹月 〇菊月

△菊開月 〇寢覚月 〇紅葉月

△木深月 〇小田刈月 〇梢の秋

△長月 可るは八月と云は九月

異名註

おめりのちう △季秋の季の末の秋の暮と云ふと云ふと云ふの暮

秋とい秋の暮と云ふ年の暮と云ふ暮にして夕の暮にている 未

秋と云ふの秋さう △梢秋の梢のこもをよとて 諸木紅葉し梢の

るをくゆく梢秋といふと季吟いといり △晩秋の暮秋と同じ

晩の秋といふ事さう △無射の上おといり △寒露の節の名さう

△玄月といふ玄のクロレと訓黒とい純陰の色さうといて玄月と云

△素秋といふ素の白し秋乃金気のはくささう如金の本色白くれち

さうの菊秋といふ當月の菊花乃咲出る月ゆさう 菊開月といふも

同じさうさう 同しさうさう 同しさうさう 同しさうさう

同しさうさう 同しさうさう 同しさうさう 同しさうさう

秘藏

彩月

月盤山いろさうり月ふありあきい

糸とあきさうり松果とさうりほ

雪玉集 梢の秋 木まの秋 実隆

名ははや梢の結けさうり月

莫傳 紅葉月

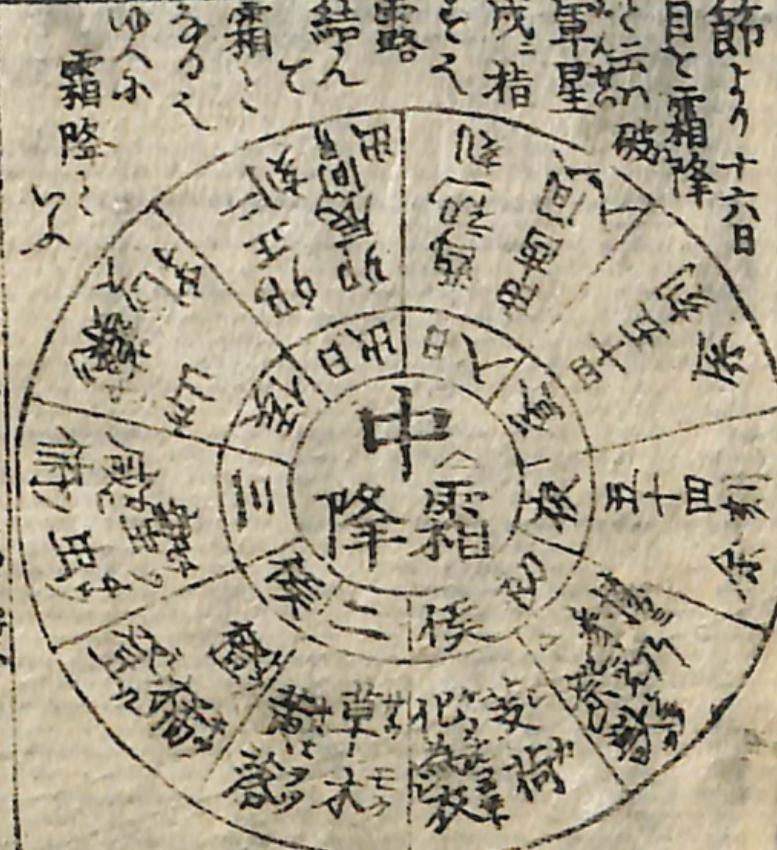
新古今 長月 花山院

秋の花はさや長月ふありさう

蔵玉 小田刈月

寒露 九月節の名の七十五候の柳木

七十二候の月盤入昼夜長短さう



射山犬云狼之尤性也
 射山犬云狼之尤性也
 射山犬云狼之尤性也

浮葉より荷の蓮の葉も
 浮葉より荷の蓮の葉も
 浮葉より荷の蓮の葉も

枯て羅のすめたる故衣
 枯て羅のすめたる故衣
 枯て羅のすめたる故衣

と云る紅葉の千草黄
 と云る紅葉の千草黄
 と云る紅葉の千草黄

みくえ此類の虫の類
 みくえ此類の虫の類
 みくえ此類の虫の類

山藥と自然諸讀あり
 山藥と自然諸讀あり
 山藥と自然諸讀あり

乳ととい実の入る事
 乳ととい実の入る事
 乳ととい実の入る事

日令 九月の日は定むる
 日令 九月の日は定むる
 日令 九月の日は定むる

朔不成 今日雨風おれ
 朔不成 今日雨風おれ
 朔不成 今日雨風おれ

日就 風霜と飛を人
 日就 風霜と飛を人
 日就 風霜と飛を人

裕 今日より八月まで
 裕 今日より八月まで
 裕 今日より八月まで

狂ひつゝの草は君は
 狂ひつゝの草は君は
 狂ひつゝの草は君は

朔 伏見御香宮 今日
 朔 伏見御香宮 今日
 朔 伏見御香宮 今日

名御諸神社より神功
 名御諸神社より神功
 名御諸神社より神功

香と称ふ是文禄年中
 香と称ふ是文禄年中
 香と称ふ是文禄年中

遷座より外より祭の
 遷座より外より祭の
 遷座より外より祭の

朔京鞍馬祭今皇神輿渡祭九日御今日

御旅所へ御出九日をさる藝明神と云。大己貴尊こころまう

朔六天王寺金堂安宮嶋今日坂金刺講刻音樂藝日市あり

南氷室祭南都四十四氏神都祭春日伶人舞樂あり大知志

○春日若宮御繩棟の式今日あり若宮御旅所の常は今皇假社を營

二今日晴るれ來年春雲日あり今日房事を慎いへ

南東大寺鎮守八幡祭此祭都久退轉や京都天明

災災の後故有て再興せなり昔小復らと嚴重なりこと

三北斗小御燈を奉らること河内日年中行司貞世

京大通寺六孫王御出多村觀都音堂水仕山城固まう

四京北野半莖神輿北野天都神祭八月なれ今絶

了今日氏地より半莖御輿を菜菓と以て神輿を造り渡御のひを各

五山城醍醐祭御出今日ありみ日野みあり

○萱尾明神祭醍醐のこみ

木幡祭柘大明神号く天忍骨奠宇治郡木幡の里

六京高臺院殿忌大閼秀吉公の都政所高臺寺方丈を職法あり

七不堪田昔諸國の田の積をして奉ることはつさと租稅を免

一あやとあり作ふたくさる田と

八心を不堪田と云なり公事根源

九年中行司いたる町のをいねぬ

非 而此の各所の古や不法田 供等

京 〇久世祭の久世の神社ハ久世郡寺

都 田村の氏神也 西の國久世村祭

遠 〇中郷祭又飛神祭とも云の祭神

江 春日四所ハ太三命と合せて五社明神

如上 北風東風吹ケハ来羊

占候 三月七月米價貴

日八 桂宮相撲 六条北西洞院西

京 〇泉涌寺舍利會の湛海と云

都 僧嘉禎未ハ宋より持ケリシ舍

利 〇此日音楽あり泉涌

寺ハ台密禪律の四宗カク

〇玉水祭の山城國井手の郷

玉水乃里ナリ

江 〇勾當内侍祭の堅田の浦カ塚あり

州 夜祭ハ内侍新田義貞の妻ハ

醍醐宵月祭 今夜社前を誂三

九不成 重陽節 〇重九ハ菊

日就日 節 〇菊天

△菜節 〇栗の節 〇栗ハ

昔ハ天子御殿ハ出御あり今日

節會行リテ韻ヲ探シ文ヲ作

文臺ハ居テ講セテる委ナリ

今日と重陽 〇ハ九ハ老陽の

数あり九ハ陽重ハハ重陽

とハハあり 〇重九ハ九九重ハ

故聲ハ應シテ名づく 〇一説ハ

種九ハ是ハ俗ハ長久ハハ

同音ナリハ祝ムナリ

菊花宴 〇重陽の宴ハ菊酒

今日群臣ハ菊酒と云ハハ

菜萸の袋と身ハ佩ビ又ハ菜萸

の實の付ケル枝ヲ折テ頭ハハ

ハ惡氣ハ去ケル云 〇

○おけ置一柔の綿してのくへとも
おりにいさくそあふめいゆる 相模

九日 佩萸

此日茱萸ヲ佩ビ
菊花酒ヲ呑ム

ハ費長房が桓景ニ災ヲサクル術ヲ教
タル故事ヲ由來トス此事甚論アリ
委シク日本歳時記小年明ヌ

○唐土ふへ今も今日山ふのふ
つて菊花酒と呑婦人茱萸の
体とおぶる事文類聚小出

菊花宴

周ノ穆王ノ愛童ヲ
慈童ト云シガ罪ヲ

家ムリテ鄆縣山ニ謫サレタリ此
山谷ニ菊花充滿セリ慈童常

ニコノ菊ノ満リヲ吞シガ終ニ八
百餘歳ノ壽ヲ保チ魏ノ文帝

ノ世ニ出テ彭祖ト名ヲカヘ文帝
ニ此術ヲ授ケ奉リシカバ文帝ヨ

ヲ受テ百年ノ壽ヲタモチ玉ヘリ
歟ル例ニヨツテ今日菊花ヲ酒ニ

ヒタシテ用ユレバ壽ヲ一スト云傳ヘ
タリ委シク日本歳時記ニ出タリ

詩 重陽五字對句

同上

捧筐萸香遍 臨風孟嘉帽

稱觴菊花濃 乘興李膺舟

詩 全七字對句

詩礎

今日暫同芳菊飲 獻酬杯

明朝應作斷蓬飛 客中愁

詩 重陽之詞

崔國輔

秋葉風吹黃蛺蝶 夕陽紅照白鱗鱗

黃女 山カラカヘツテ來タ茱萸 今日登

高醉幾人 一イタリホト酒ニヨレタソ

狀 九月節句之尺牘

重九鄭重々々名ククハフクイハ黃花馥郁イハ偶有イハ

送壺酒コルコシユヲ客敬待公之ウシニテコウノ曳藜於イレイヲ

最間催風月興趣連々カニモモモシマフクノクワニヒレニハキククハカキ玉韻詞々カ

重九カセツ佳節キウジツ○九日キクハカキ○登高日キクハカキ

○奠節ユセツ○九々良日クハノリヨシツ○黃花佳期スウクハカキ

鄭重テイイキヤウ至祝ニシユカ嘉幸カユウ○致歡キクハニク

○申悅シユフウヲ送壺酒オクルコシユヲ贈孤樽オクルコシユヲ○以モツテ

酒壚シユフウヲ曳藜アイレイ寄駕於蝸庐ヨセヨムヲ

○來叩蓬戶キタツテタケホウコ風月興趣フウゲツノクウニヒ尋芳タツシヒラ

玩景マシクオシマ○寄趣烟霞ヨセヨシユヲ連々玉韻レニクキヨクイニ

自作口頭吟ミカラ多ルコウトウノキナラ○五七言之芳韻コヒチゴニノハクイニ

九日クニあつめ酒アツメ今日コノヒよりヨリの式事ノシキコトの酒ノサケもモつめてツメて用モチひ

世諺セセリ問答ノトコト小も出シたりニ○抑元且ノチノヘの屠菘酒ノチノヘと用モチひニたりニ○桃花トウカ昔ノ

蒲ハスの酒ノサケもモ式正ノシキコトの冷酒ノサマシありニ食物ノ本草ノにもモ酒ノサケの冷飲ノサマシ宜ヨシし

冷酒ノサマシのノと用モチひニてニ貴タカシふニ○俳ハあハつツめメ酒ノサケのノ冬ノフユもモ氷ノヒ雪水ノユキ

九日クニ後籬ノチノヘ籬ノチノヘのノ三月ノミチの部ノ委ノ

俳ハ角ノツノ力ノチカラよりヨリ官ノツカサ不レてニ多シ小籬ノチノヘかニ鼠ノネズミ

狂キヤウ長ノチガらニにニ處ノトコロとトりニ入レりニ○狂キヤウ風ノカゼ小ノチガちニ後ノチのノいハまニうニ邪ノヤ貞柳ノサダヤナギ

九京クニ醍醐祭ノチノヘ下ノ醍醐ノチノヘ長尾ノチノヘ天満宮ノチノヘ

○上ノれノいハとト清滝ノチノヘ権現ノチノヘへニ護法ノチノヘ神ノチノヘ之ノ

天神ノチノヘのノ社頭ノチノヘ小能ノチノヘありニ笠取山ノチノヘのノ山上ノチノヘ山下ノチノヘにニ鎮座ノチノヘありニ

○考 ぬそくまじそをわらう向、
釜丸山の法勝のこや 慈鎮

九日 貴船祭 祭神二座高靈。
奥御前。當社ハ龍

徳の垂跡小して雨を祈り雨を止
ひる事と祈る御神あり

○新古今にわら回のうらほをうせ
うけてせせふらるゝのよの祓 加茂草

九日 鹿谷天王祭 浄土寺村十禪師
まうりともいふ

祭昔ハ廿四日なれども今ハ九日
あり京銀閣寺門前小十禪寺社あり

○中村祭。長谷の内あり夜小入
行り故俗又盗人まうりといふ

九日 大坂生玉祭 祭神活玉神今
日流鎗馬等あり

九日 河内一宮祭 平岡神社と云祭
如和州春日同神

○科長神社。祭ハ六月八月九月
九日山田村東條あり延喜式出

肥。長寄諏訪明神祭。傘針
前踊等あり甚まば十日ハ鹿解

と九日ハ供しう鹿とて各拜
殿ふて鹿と看とて酒と香とつり

播。明石大倉谷稲八神社祭
磨祭日ハ三人牛に乗アと社頭ハ

泰。例式ありゆへは牛来祭
しつあり

九日 天氣 九日ハ晴と至る雨降し
少ハ晴多ハ冬至並

来年元日兩日晴天と冬中雨
も少なり若雨降ハ月中降はく若

降されハ豊年の兆あり。終日東北
の風ありても豊年之兆ハ風ハ来年凶

九日 小袖 御湯殿記曰九月節
白よりニッ襟と云今

日より縹色小袖と着と小袖
ハハ縹入まこのことあり

十日 菊 後日菊ハ節後菊
ハ残菊ハ菊ハ残芳

菊の九日の佳節小用物等物よりふ
たれて十日小用物等こころ禁中
残菊宴あり

○千載

基後

くさくさなれはさるる霜てりてまを
霧さむひくきき葉のたれ

○連 かのちて初まきくの初まき 昌休

○非 ひきひ十日の酒れきまき 其角

○狂 九日のまきりちまき十日の
かきぬさるるるひまき 菊里

○詩 十日菊五字對句

詩磔

開選陶公與

蜂猶探 十日残
ニテニテ

○餐 英楚空詞

蝶尚狂 日テカ
キクニル

十日 小重陽

唐土の京俗今日會
して小重陽といふ本

朝ふての後宴といふ

○今日よりたいとるへ

十日 近江四宮祭

神龍降天火出見尊
大津四宮丁ふあり引

山十四番移り物たる造花等出
近郷なごは京祇園祭の山鉦よ

○大津高山寺若宮祭

十日 京都五條天神祭

祭る所少
彦名命を

アとそ京師乃俗このヤ一修
と天使の社といふ

下鳥羽祭

山城国宇治郡下鳥
羽あり午頭天王

と祭る田中天王と名づく

○非 小名ねの糸や巻れ香ふれ 豊水

十日 若○遠敷大明神祭。祭神上の宮へ
狭火火出見尊下の宮へ豊玉姫あり

十日 例幣

天子より伊勢大神
宮へ御幣と奉る

例年のことなれはかく
徳天皇と下りて此使と制する

例幣使といふ

○非 例幣使といふ

狂冠の礼と云はれてのさくくと
めとさなり初はるなり 百二

十京 ○六孫王権現祭。八條北大通
日都 寺小あり六孫王經基公と祭る

二十日 御難餅 ○日蓮上人七字の
題目と云ふ人一流

の宗門と立て安国論と著し
諸宗とそしる故小平の時頼怒て

伊豆不流と三年とて免され鎌倉
へ帰て尚諸宗と誹るふよりて弟

子とてふ土の牢ふ入し一文永八年九
月十二日鎌倉龍の口とていふ處ふて

首と切んとて時頼の子これと憐
とて死罪とてをこめ佐渡の国に流と

其後大赦ありて帰る上人遷化の
後弟子の僧竜の口ふ寺と建る

これと龍口寺といふ今日叅詣
多し像の前ふ資と供ふ今日

難ふあひいふ日ゆへ今日そな
餅と御難餅といふなり

二十日 都太秦牛祭 ○太秦廣隆寺
といふ桂宮院

内小加藍神あり大酒神と云聖
徳太子川勝ふあやて建る如く

摩多羅神と祭る日あり上宮
王院の庭ふ於て紙の衣と着て牛

小乗て高声ふ祭文とよむ此祭文
甚奇く委く追て補遺ふしう寺

俳 句 抄のよれ流して牛糸 煮堂
年糸ふちやのちり、皮つると 桃隣

二十日 大 〇多武峯祭。田身嶺といふ
日 和本殿の中央に大織冠鎌足公へ

三十日 今日晴ふれ晴久しつて残る
綿とること多し雨降る冬雨雪多し

後名月 △後の月△豆名月△栗
名月△二夜月△名残月

十三夜。此夜の月と賞とる事
寛平法皇より始まる保延元

年九月十三夜ふよの雲いそぐ
月明りく明月無双のより仰

出されしより今日と明月と
中右記不出 鳥羽天皇保安二

年小関白忠道公九月十三夜の月
を賞したまふ詩あり(歳時記に出

○五雜俎曰上已有風梨有蠹中
秋無月蟬無胎九月十三夜晴

釘靴掛断繩くつり其外説多し
日本歳時記不委一々ハ畧之

○民俗今夜豆と豆と少く食ふ粟
ても食ふ批沢委しく歳時記拾遺と

つり書不出より面白きことなり
○續後拾遺 二夜月

草庵集 頃阿
あはれけしは人のくちのけりや
月もえふおふこよひあるらん

連 玉のねらふは月の二夜は宗碩
俳 本考は無きまゝとてぬは後の月

怪 名月かきく似て月の教つては
ニツちうひのどく草月 金波

詩 九月十三夜詞 林春信
招くよけとれもさし後の月 去来

季 秋逢過十三天 末ノ秋ノ中テコヨ
ニアラタゾ 明月無雲自粲然ノ明

色 星ノヤウニ三元 蟾光相映一欄
前 月ノ光リニハヘアテラニカニ

十大 住吉相撲會 △室の市。

今日神輿場の宿院へ渡御
相撲十三番あり故ふとまふ

會くよふ今日社頭ふ外より鉢と
商人是と室の市といふ市笑姿

の神あり諸国市の始りといふ
俳 非 夢みて分別つる月ええと色蒸

在年若一松竹のいれあふれ
これこそ人の室ありたり 貞柳

十三日 京 白川祭 祭神天満宮白川村南
の方有知の生主神とす

十四日 大坂 天王寺一乘會 昔ハ今日
修行あり

十五日 大念佛會と行なり

十五日 大坂 天王寺念佛會 今日未
刻六時

堂を修行と太子の鳳輦と六
時堂あり奉り舞樂あり當寺に

て涅槃會聖霊會今日の念佛會
これを三大會といひて嚴重乃

法會あり俗ハ柳祭といふ
○三津八幡祭 ○玉造稻荷祭

十五日 京 岩倉祭 北山の岩倉山
より祭神十二座

昔ハ王城の四隅ハ岩倉ありて社と

れて帝都の守護とす是ハ其一
あり祭礼夜ハ入神供と奉る

十五日 京 栗田口祭 午頭天王と祭
る餅十七本あり

昼ハ栗田御殿ハ入り夜ハ白川
橋と越て知恩院よりいの細き

板橋と渡るとりれ上りて餅の曲
特あり甚面白きこととす

十五日 江戸 神田祭 天平二年ハ大己貴
命と鎮座古ハ

神田とて国々ハ大神宮ハ初穂と
納むる御田あり大己貴命ハ五穀

の神ありハ右神田より此神と祭
る其後延文の頃より將門の吳

と本殿のわたり祭りとて今ニ
座とす祭りの隔年とて子寅辰午

申戌ハ山王祭と此祭と江戸の大祭とす
○俳 ことばと釣酒の郊田柿系 李々

十五日 前小倉祭 祭神三座ハ應神
天皇、神功皇后、玉

依姫の十四日神輿つり殿小渡御
やぶさめあり夜分抜あり十五日祭入

六十山 東天王の社と云
日城 西天王の社の吉

田山の麓に有鉾七本あり神輿
先達てゆく是と鉾とまらふと云

其内一本の鉾鉞はバの上ふ土まて
つくり大鷹とせし名づるて大鷹

の鉾とつて神室とす 雍州府志出
一書小祭ハ九月十五日入と云

○伏見三洲祭。天武天皇と祭
る人又午頭天皇ともつり十二日の御出

○岩屋明神祭。神体宮道祖
神人山科大宅村の東ふあり

十六度會新嘗會 神嘗祭
今日

伊勢外宮へ天子より新嘗の初
穂と供しる度會とい伊勢外

宮鎮座の處の名なり内裏新
嘗會と同一と云俗小御祭

と稱と明十七日内宮ふあり事
実外宮と同一事なり

○非せそそ名わじマ新嘗會
神人米沙ひらふとせの夫が寺東巴

十六江。芝神明祭十日より十一
日戸日迄祭礼の間甚賑なり

寛仁二年九月十六日此處小鎮座
多し生薑の市あり参詣の人

兼生薑と求めたり家毎小糠漬
の中へ入漬るれと喰へ半年中

邪氣感冒れ愁ひ死のがふと
い俗小生薑祭といふ

十六日 神賑 大木 丹。大井大明神
日 堀 祭 和玉 祭 波 祭 あり

桂川御成 桂川ハ大堰川の末
流を松の尾より

南へ桂川といへ伊勢の齋宮より
立ちぬ皇女明十七日群行あり

前桂川よりたありとあり
く次の野宮の別の丸ふあり

七十不成京。諏訪祭。六条鳥丸と
日就日都。齋との間をい丁ふあり

野々宮別

伊勢大神宮へ齋宮ありてせり内

親王三年の間野の宮ふこりり

物いじりひて勢州へ旅立ちり

其と天子とろくろ櫛とて

齋宮の頭ふろせりこれと別

この櫛といふ野の宮のより

つらへこりせり野の宮とこ

ちれてつたへ行ふといふ野

の宮の小倉山の辰己ちり藪の内

小古跡と残りこれとも古の處と

ト定めてこりて多ひ一

りくともさきよりしゆ

野の宮の古跡象々あり

齋宮のこり後鳥羽院の御

宇は絶えり

七十 撰津穴綾祭

池田の民家の北山上あり綾

羽大明神と号す應神天皇卅七年
百瀬より呉の国の結織女四人と

あつて織りゆひ今呉服と

つら此呉の国の者れ始りて

なるゆり又和訓ふりて結

とはりてつら此あやとつら綾

と織る故ふ名づくあやと

の畧へ此地祭ること應神天皇

仁徳天皇乃みまこの地あれ

かり

あやとつらとつら氏久

非 米洗ふ水もはやとの星糸貴

本いよひてこれ糸か支考

八十 今日遠く行く事といひ道小

八十 支えりて志守れ至り

八十 撰津呉服祭 池田の田圃の中ふ祠あり

穴織の祠ふ隔つること十町あり

事奥前ふりてはけ祠あり

くし結をうらる地よりや池
田をくれこの里ともなり

十日大 ○今宮祭 やぶさあけり祭
坂神五座あり

○天王寺廻廊立花。十七十八両日
高津宮祭。夏祭六月十八日

十九日京 ○南禅寺亀山院御忌
妙傳寺七面明神開帳

十日 今日本齊戒沐浴しと心と淨く
これハ吉事と得るなり

十日 山城城南神祭 祭は七社下
の鳥羽中嶋壇

上。塔森。石倉。竹田。小枝の土人産
沙神と守むり鳥羽上皇乃離

宮ありて是と城南の離宮也
いんかん七城のともふありし

ゆへなるをいし今ハ鳥羽帝と
ありてともなり

十日 波利女祭 高辻室町西
あり俗ハ繁昌

の社といふて子孫のさう人と初
より此社の婆利女ありしと

いひ誤りてハニジヨといふ又それを
云あやまりて繁昌ともなり

十日 京都旅夷祭 建仁寺門前
あり宋西国師

勸請より外して旅行の海上
ねむく人の先ツ此社ハ祭つて風

波の難ありし事といひゆふ旅
まひとといふ一説十六日といひ

つりかぬくつりくハ諸国祭
礼記ハいづる面白きことなり

十日 山城幡花頭 社僧弟子髪と
剃り衆より加り

時草花と製し酒宴催す花の
臺ハ六月の日とありみてはる

おくりり
能 社の改修なる寺天窓山来山
北 今日杞柳の湯までいあきまは

一日 無病長命なりといふ

日一 北 京 ○天道社祭。五条坊門猪熊有
都 ○栢社祭。灰方の南林の内。有

日一 北 大上難波祭 俗小稻荷祭と
坂 △ 博労町あり

本社ハ仁徳天皇と祭まじり 稻荷ハ
地神として本社のかたりに鎮す六

月の御抜神輿御旅ハ渡御甚賑ハ
今日ハ秋祭として神馬の渡りあり

日一 北 江 ○根津権現祭。隔年ハあり
戸祭神委々博労釜ハ出せり

日一 北 山淀祭 小橋の乾ハあり淀
城 △ 姫神として傍ハ千

観法師の宮あり又一座伊勢
御門神祠としてありて納所揚枝

島小橋の東河中ハありこれと提
社と淀姫の説まじりあり又小

橋の北ハ大荒木社としてあり同日
神事とす又水垂ハ淀姫明神と云

ありて廿三日ハ神事ありつとて是
るつと伝あり

日二 北 大座摩祭 根州西成郡の
坂 △ 惣社として今

日の祭と相堂八十島祭として口
傳ハ六月廿二日御枝の時神輿御旅御

日四 北 河 ○植松村逆様祭。北四日と
内祭礼として廿五日と宵官とす

日四 北 江逆神祭 大津相坂關清
水大明神蟬丸の

宮と称す此処古歌ハ詠する関の
清水の旧跡多りつとて傳へて

此宮のあり処と今ハ清水町と称
とて此宮の別當と近松寺と弓し

て諸国説経者の本地とむら
浄とて説経と以てせとてする者

此寺の免状とてうけたるよしと説経
者日暮小ス夫と請ふる正徳二年乃

免状とてのりつり見たりまらつ
日の説経者果つて神輿ハ供奉とて夜と

日四 北 山木幡祭 今ハ吾々五子と倭
城 △ 今ハ吾々五子と倭

廿五 不成大天満流鋪馬の式あり

廿六 京北山祭浴北衣笠山世寅の
林中小あり六所明

神と云ふ又北山天神祭と云ふ并殿
として三穀豊あり祭廿七日とも云

廿七 大津村祭○津村御灵祭。
鎌倉権五郎景

政の灵と祭の故の五郎の社とも
つの中世より中央天照太神左の八
幡宮右の鎌倉権五郎都合三
座あり

廿八 京鳴滝祭△福と神祭。福
王子社鳴滝社と

合祭ると云ふ福王子の初め歩
荒神と云うが福王子と轉化せ
て云説あり神体は光孝天皇
の皇后班子を祀ひまうらう
とぞ京俗これと五器ゆひ
まうらうと云ふと云

○東山大谷報恩講廿七日廿八日
○醒井荒神祭○油小路火の尊祭

廿九 大光日○天王寺舍利講音樂あり
坂○晦日石の鳥居神送り

三十 小光日廿九日とす○今日風雨あり
とい水難ありの今日能々身と云

○今日の夢窓国師忌天龍寺相
国寺等持院等々とて執行あり

卅一 住吉神送攝州住吉と今
日玉出嶋御杖の

神事行りたりと云ふ神祕あり神送
と云ふ事社記に見え守十月と

神無月と云ふ人神々出雲とあり
と云ふと云ふと云ふ俗説と云うて

今日の神事と俗に神送と云ふと
云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
十月の部並に日本歳時記ありと

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと

卅二 周防山口祭吉敷郡山口あり
祭神住吉三社と

月令

九月、月中の預つてくる
雑事景物をくだり

伊勢御遷宮

内外両宮を
のわく 摂社

くも二十一年を歴せば、わさう
む造營ありあり九月をむ

つゝ御遷宮の
月しさとこまうら

番船 △綿番 △早綿。追綿
浪花をて當年の新綿

と一時小菱垣船小積込し出帆
の吉日と定め、纜と解く前後

の番と、厩と取て定老同日小
出帆と江戸着岸の前後と争

ひ少しいて、早く着岸とると
手拍子出帆の見送、餞別小船

ふて種々祝ひと送つて、うら
浪花をて綿船、世の十月小出帆

とらへ追綿とつ小綿船出帆後
跡より出らる新綿と積む船と云

夕なりこれハ十月乃季とよ
しとせり可きらん

非 番舟や枝をさる紀わうり鬼貫
番舟の出て日影もあつた、午川

落水。せとと落と水もいふ
那の実のつとれた田た

氷を切せん事をうら
とれハ霜よくそのつとつ

非 為一水考、麦一、おま、宗因
一、秋と一月仕業、れと、その茶雷

海贏廻。海螺のかう小糸と巻
席の上へ廻り打出

たつと勝と守兒童の戯へ、三、百
日並記事ハ九月九日小限る夏と

秋冷の節より冬へうけとお小歌と
とれとつと、その兒童の遊ふこと

新綿。此項新き綿吹出と
賣買とらる故季とん

秋冷の節より冬へうけとお小歌と
とれとつと、その兒童の遊ふこと

新綿。此項新き綿吹出と
賣買とらる故季とん

哥ふの新綿（新綿）の夏（夏）の詠（詠）と新綿（新綿）
 とくわて真綿（真綿）の（とく）七月十六日
 詠（詠）いてしよとまひの本綿（本綿）の（とく）
 非（非）ふん孫（孫）や白（白）葉（葉）ふおん（おん）し（し）ら（ら）る（る）故（故）栖（栖）
 のぬ（ぬ）委（委）俳（俳）ふ（ふ）新（新）綿（綿）と訓（訓）と詠（詠）
 とたひ七月十六日の季（季）入（入）新（新）綿（綿）と

時令

此部（此部）の九月（九月）時節（時節）ふひ
 ふう（ふう）ら（ら）る（る）夏（夏）霜（霜）杯（杯）の夏（夏）と出（出）

暮秋

△秋（秋）の淺（淺）△冬（冬）と待（待）△冬（冬）
 △が（が）ら（ら）う（う）△冬（冬）と隣（隣）の（と）ぎ（ぎ）

も九月中（九月中）頃（頃）より晦（晦）日（日）まで（まで）の夏（夏）と
 つ（つ）尚（尚）次（次）の詞（詞）の（も）△印（印）一（一）ある（ある）ひ
 能（能）の季（季）小（小）用（用）ゆ（ゆ）ら（ら）る（る）哥（哥）い（い）も秋（秋）
 の名（名）残（残）お（お）ま（ま）る（る）心（心）と多（多）く（く）と（と）ら（ら）る（る）

哥

家集 秋の淺 正微

△多（多）く（く）も秋（秋）の淺（淺）△川（川）△水（水）△流（流）
 △ふ（ふ）よ（よ）と（と）い（い）し（し）て（て）は（は）な（な）れ（れ）系（系）△

正治百首

ふの秋 慈鎮

△ふ（ふ）の秋（秋）指（指）ふ月（月）が（が）く（く）ふ（ふ）と（と）て
 あ（あ）し（し）ふ（ふ）速（速）ふ有（有）明（明）乃（乃）を（を）

後拾遺

秋と惜 範永

お（お）と（と）よ（よ）と（と）い（い）し（し）て（て）は（は）な（な）れ（れ）系（系）△
 考（考）ひ秋（秋）ぞわ（わ）ら（ら）む（む）後（後）々（々）

夫木

前中納言定家

△ふ（ふ）い（い）と（と）よ（よ）と（と）い（い）し（し）て（て）は（は）な（な）れ（れ）系（系）△
 嵐（嵐）う（う）と（と）い（い）し（し）て（て）は（は）な（な）れ（れ）系（系）△

金葉

中原経則

△お（お）す（す）よ（よ）ら（ら）は（は）は（は）ま（ま）れ（れ）ら（ら）る（る）秋（秋）と（と）ら（ら）る（る）の
 ね（ね）も（も）う（う）ひ（ひ）ふ（ふ）の（の）こ（こ）た（た）ん（ん）と（と）す（す）ら（ら）ん（ん）

同

春秋虫 西行

△秋（秋）あ（あ）ら（ら）と（と）よ（よ）ら（ら）る（る）ひ（ひ）の（の）夢（夢）の（こ）ら（ら）し（し）ら（ら）る（る）
 こ（こ）ら（ら）し（し）ら（ら）る（る）も（も）粒（粒）と（と）や（や）ら（ら）る（る）

詞

秋のたれと。秋のたれと。秋のたれと。

△秋（秋）の別（別）弦（弦）考（考）て（て）行（行）。△秋（秋）の別（別）弦（弦）考（考）て（て）行（行）。△秋（秋）の別（別）弦（弦）考（考）て（て）行（行）。

△秋（秋）あ（あ）ら（ら）と（と）よ（よ）ら（ら）る（る）ひ（ひ）の（の）夢（夢）の（こ）ら（ら）し（し）ら（ら）る（る）
 △秋（秋）の（名）勢（勢）△秋（秋）と（と）た（た）て△と（と）ま（ま）る（る）ね（ね）は（は）

△秋（秋）と（と）ら（ら）る（る）△秋（秋）と（と）ら（ら）る（る）△秋（秋）と（と）ら（ら）る（る）
 △秋（秋）と（と）ら（ら）る（る）△秋（秋）と（と）ら（ら）る（る）△秋（秋）と（と）ら（ら）る（る）

△秋（秋）と（と）ら（ら）る（る）△秋（秋）と（と）ら（ら）る（る）△秋（秋）と（と）ら（ら）る（る）
 △秋（秋）と（と）ら（ら）る（る）△秋（秋）と（と）ら（ら）る（る）△秋（秋）と（と）ら（ら）る（る）

ふるりの露。秋の心。そのおおく。霜のあも
 えや柔くるる。秋の。時雨。が冬をいそぐ
 ① 非 仍 路 や 大 工 の よ の 田 舎 中 杜 悠
 ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

暮秋五字對句

望極関山遠 菊枝花半在
 霜樹葉全稀

秋深烟霧多 水痕収

半山雲影前林雨 山骨瘦

十里風香晚稻花

荆溪白石出 天寒紅

葉稀山路元無雨

九月盡 九月の末

新古今 閏九月冬 大政大臣

詞 今月の秋。今月の秋。今月の秋。

歌 今月の秋。今月の秋。今月の秋。

新古今 閏九月冬 大政大臣

詞 今月の秋。今月の秋。今月の秋。

歌 今月の秋。今月の秋。今月の秋。

新古今 閏九月冬 大政大臣

詞 今月の秋。今月の秋。今月の秋。

歌 今月の秋。今月の秋。今月の秋。

能や秋の果人のちりくこひ庵の那季由

狂長月くろくもあまの目教ふそ

たれてあまのこころをうとつと天寛

野山錦 のやまののりき 山粧の艸木色付

又草花いつくく咲きつるさうらう

哥 後撰 読人不知

秋の舞花のうきものこもこゆるま

うらるたあひ深しとあまのこ

俳 秋の果れんとあまのこころをうとつと天寛

秋霜 あきのしも 霜冬入暮秋の漸置初

秋の果れんとあまのこころをうとつと天寛

俳 秋の果れんとあまのこころをうとつと天寛

詩 秋霜五字對句

江楼暗寒雨 鐘声菊店月

山郭冷秋霜 人跡板橋霜

露霜 つゆしも 露の降りて陰陽の氣を

さう陰氣勝て霜雪とさうらう

秋の未冷氣つとくされの露むと

んで霜とさうらう

哥 碧玉 後拍原院

あまのこころをうとつと天寛

秋と未降のうらうかしの草

萬葉あまのこころをうとつと天寛

あまのこころをうとつと天寛

露路時雨 つゆのとき 露の降るは

あまのこころをうとつと天寛

○作 露の草の事や松の葉の露は蓮二
りてはるるを露の草や松の葉は蓮二
北枝

○露寒 秋の末のころして露もひ
とんで霜とさくんと
さるゆへ此頃の露はさむくが
あり故はゆへさむく

草木

此部ハ九月十月諸
の草木の類とある

○菊 史正忠が菊譜ハ曰菊惟介
烈高潔ハと百草と其盛
衰と同ぢうせん云云 按てり菊
ハ花既ハ蒼とてより凋ハ至る迄

凡花と見る事四十日あり春苗と
生ハ夏盛ハ秋花と開て冬実
と結ハ根と分て植まハ花葉實と
變てと実と植まハ千莖万朶一

幹と云ハ姿態色香咸變て実ハ
仙家の翫弄不老延年の灵草ハ

○異名 日精ハ出ハ紫菊ハ文菊ハ上ハ出
貴花ハ明出ハ秋菊ハ楚辞ハ甘菊ハ事文類

隱君子 范玉能菊ハ洛英 離騷ハ佳友
事物典 出ハ月深 待 出ハ延壽客ハ

○和名 かしら草ハ百夜草 星を
形見草 ヨハ草 蕺玉 千代見 中上

かしら草 かしら草ハ金草ハ花
さか草 かしら草 秋さ草 秋
の花ハとハ花 山草 長月花

いふで草 草のありハ花のあり
△曹我菊 △永和菊 たるれくさ

たさりのさめり草

○註 △花のありハ草ハとハ梅
ハ諸木ハ先ハとハさくハ諸草ハ

れんろハゆへ名づく

△美和菊とハハ黄菊の事とい
るハ美和帝黄菊と愛した

ゆへハゆへハ美和帝と申奉る

○仁明天皇の御事あり

○按てり 承和色ハ黄色とハさる
下ハ西宮記ハ直衣の色ハ承和色と

鶯の依以てくれば黄色決せり

〔詩〕寛平菊合 ばきり草

〔和歌〕この万代をふまきり草

ばきり草 一経糸くへー葉く

〔藏玉〕星見草

〔庭〕さふさふして人多や星見草

さふさふさふさふさふさふさふさ

〔秘藏〕かりり草

〔和歌〕このまきり草のまきり草の内か

かりり草 かりり草

〔藻塩〕ふゆ草

〔和歌〕一かみの草の草の草の草の草

これもさふさふさふさふさふさふさ

〔篠目〕おきり草

〔和歌〕この花のまきり草のまきり草

まきり草 かりり草

〔英傳〕霜見草 其名古今集より

〔和歌〕ふさふさふさふさふさふさふさ

まきり草 かりり草

〔藻塩〕かりり草

〔長月〕の九果さきり草

まきり草 かりり草

〔秋無〕さきり草 其名古今集より

〔和歌〕ふさふさふさふさふさふさふさ

〔花ら〕りてそけいふ秋さきり草

かりり草 かりり草

〔藻塩〕秋さきり草 一葉 秋さきり草

〔和歌〕ふさふさふさふさふさふさふさ

かりり草 かりり草

〔蕪我〕菊さきり草 其名古今集より

〔和歌〕ふさふさふさふさふさふさふさ

〔和歌〕ふさふさふさふさふさふさふさ

〔和歌〕ふさふさふさふさふさふさふさ

〔詩〕新勅撰 月前菊 右大臣

〔和歌〕おきり草の月影さきり草

〔和歌〕おきり草の月影さきり草

〔後拾遺〕院宮庭菊 長房

〔和歌〕おきり草の月影さきり草

〔和歌〕おきり草の月影さきり草

〔家集〕菊開中友 行宗

〔和歌〕おきり草の月影さきり草

葉のうへも枝のうへもあやう
はなはたさきの方の友よりなせ

詞 花のさき。秋のさき葉。ももたの
さき。葉のさき。ちとせの花。はな葉。

八葉のさき。花。あやうよりなせ。
葉のさき。ももたの葉。菊のさき。

漬。吹上り後。花のさき。あやう
の法。花のさき。世の花。はな葉。

古伝の地。下水。菊のさき。花乃
下水。老とせ。ももたのさき。

うらやま。露。花のさき。白よ
うらやま。露。花のさき。白よ

芳のまじり。白ひま。あやう。
祝。つくし。年。ももたのさき。

養秋。かきり。さき。露。あ
い菊。おと。縁。あり。さき。よ。

あやう。さき。霜。色。の
かり。と。と。うらやま。さき。

○九月九日。いづれ。と。さき。あやう。さき。

節のさき。と。菊。あやう。さき。
九月九日のさき。十日。うらやま。

よう。と。と。九日。さき。
と。菊。の。末。又。冬。の。さき。

いづれ。あやう。さき。あやう。さき。
あやう。さき。あやう。さき。

連菊。さき。あやう。さき。宗祇
あやう。さき。あやう。さき。省柏

俳 癩。さき。あやう。さき。芭蕉
あやう。さき。あやう。さき。嵐雪

材布。さき。小判。の。身。や。菊。合。文考
あやう。さき。あやう。さき。越人

狂 菊。の。花。あやう。さき。権良
あやう。さき。あやう。さき。権良

けし。と。あやう。さき。真徳
あやう。さき。あやう。さき。真徳

幾。と。と。あやう。さき。千山
あやう。さき。あやう。さき。千山

内。と。花。の。枝。と。つ。と。貞室
あやう。さき。あやう。さき。貞室

詩 菊五字對句

露凝千片玉 曲池潔寒流

菊散一叢金 芳菊舒金蕊

摘來淺藍滿金樽 碎金香

植處清香依玉砌 青玉潤

濃露繁霜着似無 魏舒

何須更着螢兼雪 便好業

邊夜讀書 夜讀書

白菊詞

幾多光彩照庭除

花ノ色ヤヒカリガアフル

コノキクハイカホトノ花ノ色ヤヒカリガアフル

テコノニハヲテラスヤウニウルハニウシヒク

コノ菊ノハナリ白イイロテヨルモ各モツガミラレル

菊花合

殿上人の御遊とていさへハカ
度々あり和哥と詠と〇平

城天皇大同二年九月幸神泉苑西

位已上共校菊花昌泰三年詔侍臣

菊花献于棟公左右番開色香而
擇其尤者栽之殿庭

菊花香

こころと煙く
香なり

術妙 仙茶の方 黄菊と花苓と松

菊酒の方 菊の莖葉もに黍米

菊品類 程々菊 小握々

揚貴妃 白とこころあう 金目

貫黄色 銀目貫 白小銅目貫

大般若 白小重 黄大般若 黄大

大般若 薄色千

大般若 重大人

かきまろのいり存 **小紫** いり存

かき紫 いり存 **鳳凰** 黄いろ

かき紫 いり存 **伏見**

常盤 十寸紫小紫ん花のうら **黄常**

盤 千重黄桐壺 **有明**

櫻菊 さくらに似たり **銀**

三川咲分 黄いろ咲

仙臺咲 いり存 **唐車** いり存

天人 きき大いり存

二重天下 天人ふ似たり **亂**

握々 いり存 **一重握々** いり存

石山 いり存 **大朱梅** いり存

郭公 いり存 **三井寺** いり存

黄咲末摘 半ひらき

いり存

いり存

○此外△白菊△黄菊△万菊

△大菊△小菊等数百品あり

○菊品といふ本小なりき

いへ爰畧と右菊品といふ

本の花形大圓いして分毫も

たがらぬやういして堂上方の湖

哥と入り且ハ菊の植や花

の咲一やういして委一記と

地榆花 割木香 **吾亦紅**

吾亦紅 いり存 **土川**

川芍花 本名芍薬 **蛇**

休草 **蛇避草** **花**

黄今花 一名赤金 **枯腸** **花**

色又白色もあり

俳 いり存

俳 いり存

岩菊花

花黄一丸多くあり
さうり咲きて泡の如く

さしバ一名泡きくとし云立花の
と留まらん用ひてはあざとの類

葉の表青く背白
非泡きくはさき名ふは

蘆穂絮

二百余年前永禄年
中まで木綿の日本へ

種で渡す夫故真綿の外小綿
と云物は勿論木綿は布小穂

絮と入て下賤の者の布子とて
着るる今も江戸なると

中入綿とホウレイ綿と云穂入綿の
轉化せし蒲團も蒲の穂と因

て造る故の名今も大坂を木
綿と織と布とせりと云右の説

それもみよみよ母のまゝ
りるあれ花もうらや 光俊卿

非子なるは蒲團は海女の穂穂 宗鑑
右説非の故事と合して下るる説

徳宗故事

孔門ノ関子騫と
云人母先タテラレシ

カバ父後妻ヲムカヘラレシニ関子騫
至テ孝行ナリシカド繼母ハ二人の

我子ヲ愛シ繼子ノ関子騫ヲ深
クニクメル餘リ我子ニ真綿ノ衣

服ヲ着セ兄ノ子騫ハ芦ノ穂ノ入
タル衣服ヲ着タリ父コレヲ聞て後

妻ヲ去ラントイハレケレバ子騫コ
レヲトツメテイハク母在セバ一子寒

ク母去ルトキハ三子ニ寒シト云テ
母ヲ去ラル、コヲ止メ玉ヘト父諫セ

薄散

△尾花散△枯尾花。枯尾
花と云ハ枯る薄くそはの穂

が獸の尾ハ似たる故尾花と云ハ
非幾千載秋神小あど述て長月ヤ

未世の尾ふうし枯るあり
非幾千載の果ハ尾花の穂らぬ素堂

椿實

本字海石榴和名抄に出
皮といき仁と取あがりて油

と取入の千梅説ハ畿内又ハ江東の方
言小椿と木の實と云くつら

橘子 異名洞庭佳味南府。黄金丸
霜未月上。木奴事。遺母

○橘の説とるなりと多し先密柑
さりと定むる

橘の子じて季節用つは橘又ハ
盧橘として哥連能もハ夏とす

密柑 紀州有田肥後八代を
家上とせはるり

○能ハ好の飲ほしやまを吹芭蕉
吹わはれさとい今の密柑ハ宗鑑

柑子 橘の後ハ渡江物ハ鼻
物語ハ石のうまじり

かる水ハ小柑子とのめりたそ
つとてとれやハ○又謡曲の通小

町ち文ハ大小柑子金柑とて
京撮の俗靴始ハ庄ハ小

柑子ハ密柑ハ賣りのハ大柑
子ハ密柑ハ皮鹿ハ柑子ハ皮細密

乳橘 俗九年母と各
母ヤとろく其ハ風の香替

金柑 金橘と云
ハ金柑ヤ

○密柑。九年母。金柑の説
真洲の説ハ小柑子ハ金柑とん

大柑子ハ密柑とるべいとりのハ
契沖の説ハ小柑子密柑大

柑子九年母とるべいとりのハ
いんまは是とるキ

温州橘 其葉密柑ハ似て薄く
ハ其実形密柑ハ似

温州ハ漢土の地名ハ此ハ産
る橘ハ諸州ハもとてあら

美なりハハ温州橘と
名はもて名だか

佛手柑 実の形ハ人の手の如
指あり故ハ佛手

柑と云味よか香気ハ
昔日本ハ近世ハ

枳殼 人家垣植る(俳)かきまの法印

楓樹 此名ハ蜜名之其實初め熟とれ

(俳) 鎌倉の萩如し楓樹このつら 芭蕉

南天燭子 実ハ赤小豆の如く數十一ツと云うにまうとあり

聖子桐實 天竺桂の実あき どの木と云ふの之

蠟ハ 割る 物ハ やぶ肉桂とも云

皂角子 (和名) 皂莢△西海子。大木あり葉ハ槐ハ 似

垂ル 実ハ豆の如くさや 垂ル 長ク 尺余ハ 及ぶ夏黄

白の花とひく (俳) さいじのも 緩ク ねガ 瓜ハ 夏

木薬子 兼ハ藤のじ 俗ハ実ト ツグト 念ト

珠ハ 作ル 少ク 一名菩提樹とも云 ころへハ 此実のか 衣ト

あハ 甚ニ 能ク あり (俳) ひくト のせ と捨 破ル 衣ハ 麻文

菩提樹 樹葉共 椿ハ 似ト 青ハ 似テ やク 尖ハ 長シ 尖ハ 枇杷ハ

似ト 念珠ハ 作ル 俗ハ鬼見愁ト 名づく 能ク 邪氣ト 云ハ 秘傳

今ハ京永観堂も ありト 云ハ 花鏡

川棟子 俗ハ此花と棟ハ 真ハ 楨ト 大ハ 異ト 実ト 金鈴子ハ 云ハ 形状ハ 小ト

つト の名ハ 菜種ハ 苦棟ト 云ハ (俳) 我ハ の釣ル 合ハ のは 杜国

桐油實 実ハ 大ク 油ハ 漆ハ 似ト 用ハ 法ハ あり 其功ハ 荏油ハ 似ト

本ハ 聖子桐ハ 虎子桐ト 云ハ 是ハ

掠實

木の榎の木に似て木一
種変生するべし実も又

同じ熟して黒い味甘く小鳥
好んでこれに食ふ葉ハ物と磨

き幹ハ物と寸株と截盤持盤
と念珠も作り用とす

事甚多... びぐまも大木とるけり
① 掠の実は長とさうむきや電白羽

楨榎實

高木あり花木瓜に似
たり実ハ楨榎に似て

さぐく花ハ愛とるけり
① 能がやけはむかやめてさるるれ千代

榎實

又榎とも名但種類あ
る実と結ぶものハ榎

此実の名と榎と名して和名つ
るに黒色と漆の物ハ楸半と

つくして栗より大きく葉の大
さハ七八寸なり以て栗の同種具

物あり遠国山家これと類と
る榎とさうり共と手元の甚

セリきりの故世の諺ハトチメン
棒とさると急るるこのたさるる

つら葉ハハツ手小似たり
① 山ふらとさるる水とるん

うろくあるさうり拾ふ程 西行
① 非さうり実や一字と漆す三天経其角

光母草實

実熟して赤く四時
葉凋す故ハ万年

青の名ありて唐ハ嘉祝ハ
ら亦用也ハ花鏡ハ見えたり

① 非はむきやハ葉秋回ハかりの千代
るハ物ハ月やさうりハりの実史方

栗子

異名 河東飯。天台道
果事物。砂糖舶来せり

先ハ栗子ハ果菓の最上なり漢
土にもこれと貴み見えて唐の

李商隱ハ雜纂ハ富貴の躰と
云ハ栗の皮と出ヤリ干て白ハ

て搗粗皮と取らるる搗栗と云
盤とて打らるる打栗と云

故小推と云うりついで実のこゝろ
るる木の一名鐵楮と云う

○**非** 夏に此推をさし山ちるる白州
笈のうへに足推の附るる那尚白

推柴 △推の葉 △推の小枝
△海で推の推柴と云ハ

推の木の柴ふるるるるる推ハ
至て小枝の多き物也山人の切り

て柴ふるるる併いさご柴ふせご
るる推柴とよめる事もあり

○**非** 秋と守哥ふ冬冬題の詩り
△もとは推ハ推の火ありあり

○**哥** 後撰 けふふとい恨さうるる美香
のさるる山のいひるるふん

拾遺 美香のいふ山の杖は木の
さるるいふるるるるる

團栗 榲の実あり ○**非** 冬々ふ
徐宜の眼るるす寶子外鬼貫

新胡桃 核果 ○陳倉巨室
一種山くらり鬼くらり

といふ上品いふるる云ハ此中ハ
雜りて甚皮薄くて破やと

○唐ふ白胡桃と云うるるの
ありるる李白の詩あり

紅羅袖裏分明見白玉盤
中看卻無疑見老僧休念

誦腕前推下水晶珠 赤キウス
ニアリテハアキラカニ見ユレトモ白キ玉

ノウツハニアリテハ見ワカラストウヤラ
老ソウガスイレヤウノジュスラツニクヤウナ

新榧子 大木多し木小北と牡
とあり各花あれども

牡ハ実と結ぶとる北ハ枝横ハ
なま牡ハ枝上へ起るる

○**俳** 極のうさぎのふよ 沖紋 紹藤
のの實はふいも鈴よらぐられ暢中

新松子 松とともふ又松ふ
らうとも所ふよりてつら
又松の実といふらうさ中ふあ
まは是と仁ともふらう

水木子

喬木ノ葉梅^り花^り藤^りて黄^り

也実も梅^り花^りの^り攪^りり生^りど

俳^り火^りとりえていぬあま^りの^り浮^り世^り井蛙

菜萁

山菜萁。食菜萁。呉菜萁。つづも種

類^りより春^り細^りの^り黄^り花^り用^りの^り秋^り紅^りの^り色^り

俳^り花^りの^りてお^りて^りを^りれ^り小^り紫^り水^り音

瓢樹

蚊^り子^り樹^り又^りイスノ^り木^りも

葉^りふ^りふ^りと^り出^りる^り物^り瓢^り箆^りの^りこ^り

く^り胡椒^りの^り粉^りの^り器^りの^り用^り

又^り吹^りけ^りの^り笛^りの^り音^りあり^り此^り木^りの^り火^り

災^りと^り除^りる^り火^りと^り附^りけ^り葉^りの^り

風^りと^り吹^り出^りて^り火^りと^り避^りく^り故^り庭^り砌^り

の^り生^り垣^りふ^りふ^りら^りる^り元^り火^り除^り木^り

と^りい^りい^りと^りヒヨケ^りの^り中^り畧^りと^りい^り

俳^りい^りんの^り垣^りを^りて^りと^り考^りつ^りぬ^り来^り山

榎實

胡椒^りの^り大^りと^りい^りて^り味^り

ま^りり^りと^りく^りと^りん

俳^りあ^りる^り枝^りの^り実^りふ^りた^りる^り枝^りあ^り葉^り蒸^り

熟柿

鳥^り柿^りの^りつ^りぎ^りも^りあ^り柿^り

柿^り三^り秋^りの^り部^りも^り出^りり

俳^り腸^りの^りけ^りの^りり^りら^りる^りり^りら^りる^り考^り

無花果

古^り名^り花^りを^りて^りの^りい^り

花^りを^りて^り美^りの^り其^り実^り枝^り間^りふ

あり^り状^り木^り饅^り頭^りの^りこ^り

鴨上戸

本^り名^り白^り英^りの^り一^り名^り鬼^り目^りと

て^りの^り名^りを^りり^り鬼^り目^りの^り実^りと^りい^り

又^りツク^りミ^りノ^りイ^りヒ^り子^りと^りい^りひ^りよ^りら^り

好^りん^りこ^り此^り実^りと^り食^りふ^りこ

俳^りツ^りク^りミ^りノ^りイ^りヒ^り子^りと^りい^りひ^りよ^りら^り宗^り因^り

仙蓼

本^り名^り珊^り瑚^り葉^りと^りい^り俗^りよ

赤^りと^り小^りの^り珊^り瑚^り珠^りの^りお^りり^り小

う^りら^りの^り紅^りと^りい^りて^り愛^りと^りい^りべ^り

○枝の節葉のまじり故に仙葉と
異名とす。この本邦にその実名と

るれり。又仙葉ともかくし

○非 伝春の実は鈍く人のむくひが三惟

晩稻 △暹稻 △晚田。いづれも
実のち稲なり

○非 伝のいはるやゆん田のふ支考
州尾の一夜にさしたる移外支龍

漆子 △漆樹の漆をわけて
こも同訓なり。汁の木

よりいぞ物とゆるへ子の絞をて
蠟とす。但し木の異種ありて

子と汁と取は別あり

○非 木の枝の皮をわけて漆子と宗因

紅葉 赤葉とも云 異名 △色見叶
○妻恋草の錦叶 出づり

木の葉赤く又い黄なるを紅葉と
いふ。此詞と体として紅葉と黄

葉ともかく此ころ色づく葉の

○楡。楸。柿。白膠木の漆。蕪
。柞。蒔。櫻。梅。合歡。あやぎ

右の品々紅葉とつたれば九月の季

なり。其内楓の紅葉は別して人
毎に賞する故紅葉といふ楓の

事く多し。哥に楓ふかざうに諸
木の葉の赤くするを紅葉と

いふ。又紅葉とていふも。梢の
うき又い。まぢれは漆の梢を

よもして紅葉のこもるなり
○楓。いさだ。もも。そのま由こもら

等い七月の草木の部ふ委しく説あり
○哥 古今和歌集紅葉の哥へ

さほふのちその紅葉ふらうめを
よもるを紅葉とてす。月を

かぢふのちふらふ葉ふらうめを
照と日れいづりする時をて

立田川に葉をこめててうらうら
いづりいあきや終せん

○枝の節蓼のよみ故に仙蓼と
異名と云ふ。此の本邦にその実名と

るは、又仙霊ともかへ

○仙蓼の実不詳人のやみか三惟

晩稻 △暹稻 △晚田のいづれも
かきく実の稲なり

○非 俗のいはくやみん田つる支考
州尾の一夜のさだ晩稲外支龍

漆子 △漆樹の漆をちりて
きも同訛なり 汁の木

よりいづ物とゆるし子の絞を
織り守但し木も異種ありて

子と汁と取は別あり

○非 木の枝の女をいじ漆子の糸因

紅葉 赤葉とも云 異名 △色見州
○妻恋草の錦州 出づり

木の葉赤く又の黄なるを
いひ紅葉と云ふ

よみ此詞と体して紅葉と黄
葉ともいひ此ころ色づく葉の

○楹。楸。棟。白膠木。漆。蓼。
柞。蒨。櫻。梅。合歡。あやき

右の品々紅葉とつれは九月の季

なり其内楓の紅葉は別して人
毎に賞する故紅葉といひ楓の

事くより奇に楓をかきうに諸
木の葉の赤くするを紅葉と

いひ又紅葉と云へども。楸の
うき又いひ。あざなは漆の梢を

よみて紅葉のこころなるなり
○楓のいさだ。もそのま由こ。さぢ

等い七月の草木の部も委しく説あり

○昔 古今和歌集紅葉の昔に

よみんそのたそのむふちうあそ
よるさかちよとてす月を

かき山の岩をたふすふちうあそ
思と日れいづり又るけりて

立田川に紅葉をいづりてさるる
いづりいづりさかちよとてす月を

夫木 △葛のおまふ

つこのさゆらの中らふちふ葛も
秋さしなれいさうりゆく

金葉

源師賢

ちつきれ指やりつこおつふ
皆その原い紅葉しはく

夫木 △葛の紅葉 家隆

つこのさゆらの中らふちふ葛も
秋さしなれいさうりゆく

新古今 △楹紅葉

ちつきれ指やりつこおつふ
皆その原い紅葉しはく

夫木 △枝の紅葉 顯昭

松さけふしふ時おのりあらん
忘下 枝まうさみちせり

全 △さる紅葉 知家

人志世に紅葉しはくみるちの
細川ももじりりふれん

詞 本の下らち。おまふはく。

つこのさゆらの中らふちふ葛も
秋さしなれいさうりゆく

△紅葉しはく△下紅葉△水の葉

△紅葉しはく△下紅葉△水の葉

△川紅葉 秋さる冬ふりり

△紅葉しはく△下紅葉△水の葉

△紅葉しはく△下紅葉△水の葉

詩 林間 煖酒 焚紅葉 白樂天

△紅葉散 哥小い暮秋ふうりく

△紅葉散 哥小い暮秋ふうりく

△紅葉散 哥小い暮秋ふうりく

△紅葉散 哥小い暮秋ふうりく

△紅葉散 哥小い暮秋ふうりく

俳 紅葉も来つく後の紅葉は支考

紅葉も来つく後の紅葉は支考

朝の苑ふせりき 玉露多き梅里
 慈王の御成りしもの如き山 襄中
 母親の祈の如き 念息せき 貫玉
 拂紅糸親まの坊の塵もあり 野明
 肩ぬるの換よかりし 玉露時 釵夕
 蟬 燭ふかりても赤し 燈の紫 李坡
 狂くくせいの像ふきくくろ尾山
 けおとくしるる余まの如き 木端

詩 紅葉五字對句

林端散餘綺 似燒非因次
 木杪絢殘霞 如花不待春
コソエニハキエラツタカスモ
ガイロトルヤウナ

詩 全七字對句 詩礎

紅霞迥遍具江内 殘照晚
 錦綺粧成蜀道中 斷霞秋
コソハカニアチシ
コソハカニアチシ
コソハカニアチシ
コソハカニアチシ

詩 紅葉詞 杜牧

遠上寒山石徑斜 白雲生處有人家
 停車坐愛楓林晚 霜葉紅於二月花
ハルぐトウツ
サムイ山ハノ
サセテソ、ロニ
サウヨウハシト古

天隲 魏紅葉文

假山之楓光色欲然
 折數枝以獻左右
 恐散飛愛護為妙
カサノ
アチ
カサ
モツテ
ケシカ
ユウニ
オシラスハサシ
アイ
タリ
イハ

天隲 唇唇ヲ記ス并ニ註解

光色欲然 楓樹掩映燦爛
カサ
モツテ
ケシカ
ユウニ
オシラスハサシ
アイ
タリ
イハ

○楓葉潤色紅煒々 ○霜

モミチカイロツキニシテヨホドニコトニ
ナリマシタ

楓粧色シロカキ熒紅アカカキ

折數枝以獻オチス

左右為折一枝サマサマニ

獻忱鑒オマケ

多荒庭幾枝オホサバ

聊效芹意オホサバ

圖隅固之ホククワカウ

楓為折一朶當オホサバ

野獻ヤテニ

但恐散飛タテマシ

愛護為妙アイゴ

風霜フウソウ

色イロ

色イロ

艶妍エンケン

不耐數日タマヘ

移竹筒厭ウツタ

風霜フウソウ

色イロ

藤原朝仲

千載

毛くぬねく風のきりて

ちりけけそのみよるなり

在在も冬もたゞ美のきて松の色

秋小あふてもけよあふても貞柳

詩 全七字對句 詩礎

濃霜滿徑無紅葉 終待鶴

晚日高枝有白雲 味成龍

詩 色不變松詞 無名氏

半依岩岫半是雲 八岩ニヨリカ

寒寒一ホシタキニタケ高クハエテ 一事頗為

清節累清節累コノ松ノヒトツノケツハク

ニナニナ秦時曾作ニナ大夫官シクウ

ノトキニ大夫ノクハンヲサツケラレ

夜ガニンゲンノ身ノウヘモコノヤウナ

破芭蕉

秋風ふやぶくろう
世のそらうらさくさ

たると多く哥ふさふ

非 花もふる終るは破芭蕉貴

花は風ふあそふ花は多くと

やふらう室の芭蕉うらふ人貞徳

干土生 干土田。櫛。縮。孫。縮。櫛。田より再い生さ

といふ古名あつたあひもつ

堀川百首

えりてせいの田のひつらひこえて

積の小スウをといふあふらふ

うら枯 草木のひつ葉より
色つきかろとつ

夫太 ちさち小孫の篠系うら枯て

月吹うらふ沙らふのうら

俳 ちちの葉ふららうら加翠

うら枯やうらら松の隣を桃溪

緑豆引 豆引。小豆引。実のうらと此頃いく

蒼夏川 俳 ぼもそらうらて
若方まら乃の声此鯉

草牡丹 紫衣菊。貴布祢菊。加賀菊。繡絡菊。

京を貴布祢菊といふ大和

にて州牡丹といふ中国筋まで

シウメイ菊と云北国にて加賀

菊といふ

佛甲草 俗小岩蓮花といふ
花ひくさて実あり

小蓮花 岩蓮花を葉細
長

菊弱花 葉の長さ二尺が

うらにて天南星小似うら

この月根を掘るあり

櫛實 櫛の俗字といらぬの
実小大似うら櫛の食

櫛の食さふらたないらぬ

の毛ありかふの毛なり

梅嫌

子と結んば(非)梅とれ
加生

種植

○櫻麥。油菜。蒿苜。○
芥菜。○紅花。○蚕豆。○

水仙。○春菜。○大蒜。○小麥。○大麥。○
右の品々此月種をまきべし

移栽

牡丹。芍薬。竹。其
外諸の果木此月より

植てより 月令廣義に出入り尚又
種まきた果木より久の仕や

諸菜此月取入る下様等まき
委しく日本歳時記九月の処に出す

草用意

菓木より実をむき方
上十五日の内よりゆれ

実多し又菓初て熟るとは兩
手にてまきべし年々実多し

実のらざる木の実の守法
のそいて
穴とわり実のる木とよりゆれ

菓鳥の人の法
熟るとる時ツツ
と取らざるも取らぬ鳥とむ

生類

此部は九月一ヶ月
の生類を集めあるす

尾越鴨

山を越てかよふ朝
夕々々き間ある

此とたの鳥、いづれにも隨分
山のいづれに尾ととりまきふ

越ゆりゆふ名づく其外説多し
(非)尾とかく小鴨やとぐを茶原国方

熊栗棚

熊の冬に穴小入
蟻とて春と待

て出て木ふのがり好んで栗を
食ふ又枝と折るべ鋪て石巖枯

木の中小設く是と熊の架と云
(非)白鳥のふる木けりか柄とて

大山の麓のそとよりかへ為家
(非)棚とかく熊そふのほふこと其番

霜踏鹿

霜うれに尾死ふ
こころけゆるを麻の

きくそをけりぬるえたり定家
(非)行るる霜の心麻の法はまこ由

蜜柑と夏物を貯る方

杉の箱の

うらふ竹とこしと糸にてつうろをこ
うくして下家燻ぐふ入かくべし

所貯る年中貯る方

あつじき梅と

厚このまわりと漆をこよくわり
ふ入ふとよくしてせやく

飲食

九月一ヶ月食物の類とあら先出と

新蕎麥

新蕎麥や客も給
はも後より可也

新蕎麥と麻豆は不焚りたり玄城

柚味噌

柚釜。柚干
非 此はオナ名陽明家へ

消しをマ柚をふけて後の上オ左

とち餅

榎の実と持き浸し粉
くろりて團子とす

蒲萄酒

世俗の和制とる物を
好酒ふぶとと浸し

置ておれとのわり漢土の制と
ハ異なりと

九月飲食 料理献立

禁 生姜ハ九月多く食へ
物 春小至とと眼と病む壽
を撒し 筋力と減らす妊婦
これと食へ生を子六指さしむ

○冬瓜今月食へ反胃と病む
霜ふつて後食ふべし 孫真人の説

好 雞肉 九月より十一月まで食
物 豆一 稍補あり他月の宜りず

理料 汁 菜付とす

ちんじご 小かぶ 手房とす

あまご白やま くら塩たらし 菜こんぶ

あまご ちんじご ちんじご

あまご ちんじご ちんじご

差味

松茸、人参、
きのこ、
きのこ、
きのこ、

球、人参、
きのこ、
きのこ、

竹、
きのこ、
きのこ、
きのこ、

きのこ、
きのこ、
きのこ、

煮物

竹、
干、
きのこ、

和會物

松茸、
きのこ、
きのこ、

松茸、
きのこ、
きのこ、

吸物

松茸、
きのこ、
きのこ、

松茸、
きのこ、
きのこ、

| | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 松茸 | きのこ | きのこ | 松茸 | きのこ | きのこ |
| きのこ | きのこ | きのこ | きのこ | きのこ | きのこ |
| きのこ | きのこ | きのこ | きのこ | きのこ | きのこ |
| きのこ | きのこ | きのこ | きのこ | きのこ | きのこ |
| きのこ | きのこ | きのこ | きのこ | きのこ | きのこ |
| きのこ | きのこ | きのこ | きのこ | きのこ | きのこ |
| きのこ | きのこ | きのこ | きのこ | きのこ | きのこ |
| きのこ | きのこ | きのこ | きのこ | きのこ | きのこ |
| きのこ | きのこ | きのこ | きのこ | きのこ | きのこ |
| きのこ | きのこ | きのこ | きのこ | きのこ | きのこ |

日本歳時記拾遺

全三冊

先年貝原先生作の日本歳時記全冊

賣物、中、右、家、時、記、長、月、令、物、全

拾遺と号し、中、土、用、の、各、格、各、月、節、分、の、と、え、雅、俗、の、好、嫌、を、加、へ、お、も

あ、ろ、く、化、し、能、傳、の、後、り、と、守

博物荃 小本 合本一冊

社本の社佛、人物、草木、魚、鳥、を、外、天地の間の、多、委、り、出、し、委、り、と、守

あ、ろ、く、化、し、能、傳、の、後、り、と、守

あ、ろ、く、化、し、能、傳、の、後、り、と、守

神佛祭礼記 小本一冊

日本、中、神、社、の、祭、礼、佛、家、の、縁、日、多、く、守、集、め、故、り、來、歴、と、も、り、す、不、が、な、法、入、り

